
【巻頭言】

運動疫学をふりかえり，そして，これからを考える

小熊 祐子¹⁾

1) 慶應義塾大学スポーツ医学研究センター・大学院健康マネジメント研究科

運動疫学研究会の学会化が進められています。思い起こせば，運動疫学研究会が発足したのは，1998年9月でした。今年で15年目を迎えることとなります。初代会長の下光輝一先生，運営委員の先生方はじめ，多くの方のご尽力に敬意を表します。更に会が発展してきていることは悦ばしい限りです。

実は，私は発足当初より入会させていただいておりました。1990年代に入り，*exercise* から *physical activity*，体力増強から健康増進・疾病予防と，いわゆる身体活動指針のパラダイムシフトが起こり，1996年には米国の *Surgeon General Report*，“*Physical Activity and Health*”がまとめられました。1998年当時は，*physical activity* という言葉がなじんできた時期でありましょうか。私は1994年より毎年アメリカスポーツ医学会の年次集会に参加していましたが，当時のアメリカスポーツ医学会は今以上に熱気があり，この分野に，わくわくする魅力を感じました。そして自分自身，“疫学”の知識・スキルが乏しいことを身に染みて感じていたので，運動疫学研究会発足の案内とともに，入会を決めたのでした。第1回の運動疫学研究会が確か横浜で開催され，大盛況であったことを記憶しています。この分野への期待，ニーズが大きかったと考えられます。

身体活動指針がエビデンスに基づき作られたことは，画期的なことでありました。その後は，より詳細なエビデンスの確立，そして，実際エビデンスに基づいた対策，活用が行われていくわけです。身体活動指針が出され，人々の活動量は増大したのでしょうか。疫学においては，確固たるエビデンスを作るとともに，それをを用い，有効に活用していくことが重要です。実社会では，個人のレベルだけでなく，マルチレベルでの対応が重要で (*ecological model*)，得られた効果を維持していくためにも，多分野の協働や社会環境の整備が必要であることが，その後特に強調されてきています。

1つ興味深い事例を紹介します。1999年に *JAMA* に掲載された，*Andrea Dunn* らの有名な論文“*Comparison of lifestyle and structured interventions to increase physical activity and cardiorespiratory fitness: a randomized trial*” (*JAMA*. 1999; 281: 327-34.) はダラスの *Cooper Aerobic Center* で精度高く行われた無作為化比較試験です。この研究成果をもとに，“*Active living every day*”のプログラムが作られ，本やウェブ版も出されます。指導者向けに研修コースが同センターで開催された折には私も受講しました。そして，この研究は外的妥当性を高め，実社会での実行可能性が焦点に，*translational study* が行われていきます (*AJPM*. 2008; 35: 340-51.)。更に，維持 (*AJPM*. 2009; 37: 501-4.)，費用対効果にも及びます。この例は *RCT* から実社会のコミュニティでできるプログラムに応用し，その成果を身体機能評価で確認していった例です。

このように，種々のレベルで運動疫学研究にかかわることはできると思います。運動疫学のすそ野を広げるとともに，切磋琢磨し，コアをわかった人をしっかり養成していく必要があると考えます。この会は，専門性を極めた議論のできる場所でもあります。また，運動疫学セミナーや学術集会にみられるように，初心者でも学べる道が充実して提供されています。

学会化にあたり，より充実した内容になるよう，学会員の方々がわくわくする議論ができる場になるよう，運営委員の一人として学会づくりに貢献していければ，幸いです。